# 登山客の往来が要因、保全協発足

# 求めたいマナー向上

## 朝日連峰 登山道の裸地化、雨水浸食進む

寒河江支社 五十嵐 聡

本県と新潟県にまたがる朝日連峰で近年、登山道が裸地化し、雨水で浸食される個所が目立っている。年々増える登山客の行動が一因とされ、問題解決の決め手が見当たらないため地元の山岳会や環境保護団体は頭を悩ませている。ことし5月には保全協議会が発足。普段はそれぞれが登山道の補修、維持に取り組んでいる各団体が、連携して保全に乗り出した。

朝日連峰は鶴岡、西川、大江、朝日、小国の県内1市4町と新潟県村上市にまたがり、大朝日岳（1、870㍍）、以東岳（1、771㍍）など標高1500～2000㍍の山々が連なる。

鶴岡市の環境省東北地方環境事務所羽黒自然保護官事務所によると、標高が高くない割に奥深い点が登山客の人気を集めているという。近年は、中高年の退職者を中心とした登山ブームで入山者がさらに増加。地元山岳会の男性は「10年ほど前から多くなった。最近は関東や関西地方の団体ツアーで大勢の人が訪れている」と話す。

だが登山客が増えるにつれ、登山道周辺の植物が枯れ、荒廃するケースが目立つようになった。

仕組みはこうだ。登山道を大勢の人が歩くと、踏み固められた植物が枯れ、土だけの不安定な状態になる（裸地化）。土は雨で下流に流れ、登山道はV字状に削られる（ガリー浸食）。浸食された道は歩きにくいため、登山者は脇の草地を歩く。次第にこの草地も枯れ、浸食が拡大する。この悪循環が緑地を消失させている。風が強い山頂や稜線（りょうせん）付近では、もともと植生が弱いため、登山道の荒廃がより顕著だという。

こうした中、同事務所と地元山岳会などが、2007年8月から現地調査や保全方法の実証試験、意見交換会を重ねた。荒廃状況や登山利用の多さから「重点整備個所」とした7カ所を含む36カ所が、整備が必要な個所として確認された。

関係者が連携して情報を共有し、よりきめ細かい効果的な活動ができるよう、ことし5月に協議会を設立。22の団体・個人が会員として参加し同事務所が事務局を務める。9月下旬には、大朝日岳北側の銀玉水周辺で初の連携作業を行う。浸食が進んだ登山道付近に土のうを積むなど排水路を作り、裸地化した場所を緑化ネットで覆う計画だ。

一方、ある山岳関係者は、毎年のように増える登山客の一部のモラル向上を訴える。初心者の中には、登山道を外れて植物を踏み固めたり、登山用のストックであちこちに穴を開ける人もいるという。ただ現状では、登山者数や行動を制限することは難しい。「見掛けたら注意するが、全員に理解を求めるのは難しい。登山客が来ることはうれしいことなんだが…」と複雑な胸の内を語る。

いったん荒れてしまった部分は、すぐには元に戻らない。荒廃個所に修復の措置を施すことができたとしても、復元には長い年月が必要だ。だが登山ブームは今後も続き、多くの登山客が朝日連峰を訪れるだろう。現場を熟知した山岳関係者の地道な努力、各団体の連携した取り組みに期待するとともに、何よりも山登りを楽しむ人の保全に対する理解やマナーの向上を求めたい。

2009年（平成21年）9月6日（日曜日）